

をつたつて中くらるのが一匹走り出た。塵拂ひの追打ちに驚いて疊の上に飛び下つたのを、よしつと横に拂つたのが見事に外れて、床の間に飛び上つて右往左往する。落ちつかねば仕損じると姿勢を整へる際に、ふと思ひ浮んだのが、いつぞや新村博士から傳受の鼠退治の要領である。鼠を仕留めるには、走る鼠の位置より一二三寸前を狙つて、力一ぱい打込むべしといふのである。あのおだやかな新村さんが度々の對鼠戰からあみ出された必勝の戰術だといふので、成程と感嘆し、折があつたらやつてやらうとかねぐ思つてゐたが、今こそ役に立つことになったのである。機會をつかんでこゝぞと許りに打ち下したのであつたが、アーそれがいけなかつた。「二三寸前」に夢中になつて、鼠の脳天を打つ前に、大事の壺のてっぺんを見事に叩き割つてしまつた。もう鼠どころではない。音を聞きつけて襖を開けて入つて來た娘は、打ちのめされた筈の鼠の代りに、青い壺の身と頭とを左右の手にして、泣き出しそうな相好で立ちすくんでゐる父親を見出したさうである。割れた壺はなんとか接ぎ合せはしたものゝ、勿論割れ目の殘つた疵物である。それ以來見るのも嫌になつて片付けてしまつたが、それでも未練が残つて時にはかうして取り出すこともあるのである。

とりとめもなくこんなことを思ひ出しながら、入念に文筐の中を調べたけれど、肝腎の抜書は矢張り見つからない。或はこれも魔性の鼠が先廻りをして、巣の中にでもくはへ込んだのかも知れぬ。

(文藝春秋第二十六卷第十一號、昭和二十三年十一月)